

# 岡本太郎の芸術思想・作品に関する先行研究とその問題点

## Early Literature and Problems of Thought for the Art and Works of Taro Okamoto

安森 大樹

Daiki YASUMORI

崇城大学大学院芸術研究科博士後期課程

Doctoral Course, Graduate School of Art, Sojo University

キーワード：岡本太郎、先行研究、美術史学、社会学、哲学、思想史学、美術教育学

Keywords: Taro Okamoto, earlier literature, art history, sociology, philosophy, intellectual historian, visual arts education

### Summary

Taro Okamoto, who played role as an avant-garde artist in postwar Japan, not only produced works but also had a great influence on the art world and the society of those days. It is implied through the continuous holding of exhibitions, video works and features in magazines focused on Okamoto as well as research in various academic fields. However, from my point of view, there is no study that provides an overview of the early literature on Okamoto, analyzes who addresses what related to Okamoto, in particular method.

In this study, I investigated the academic fields of the researchers to divide them into four fields: “art critic and art historian,” “sociologist, philosopher and intellectual historian,” “art pedagogist,” and “others.” Then, I organized discussions by field and chronologically, and verified the contents to reveal the academic fields, researchers, current status of research and unresolved issues of study on Okamoto.

## はじめに－岡本太郎の略歴と先行研究の概観方法

岡本太郎は1911年に、漫画家の岡本一平と小説家で詩人でもあった岡本かの子の長男として、現在の川崎市に生まれた。1929年、18歳の時に慶應義塾普通部を卒業し、東京美術学校（現・東京芸術大学）洋画科に入学したが、同年、朝日新聞特派員としてロンドン海軍軍縮会議の取材に赴く父・一平に同行して渡欧し、ロンドンへの経由地点であったパリに1930年から1940年まで11年間滞在し続けることになった。1933年、抽象芸術運動を進める前衛的芸術グループ、「アブストラクシオン・クレアシオン」に最年少（22歳）で参加（3年後脱会）した。同年、岡本の思想に影響を与えた哲学者ジョルジュ・バタイユの演説を聞き、交流を持つようになった。1936、1938年には、「サロン・デ・シュール・アンデパンダン展」と「国際シュルレアリスム・パリ展」にパリ時代の代表作《痛ましき腕》を出品した。また、パリ大学で民俗学を専攻し、社会学者マルセル・モースに師事する一方、バタイユが組織していた秘密結社「アセファル（無頭人）」にも参加した。29歳となった1940年、ドイツ軍によるパリ陥落から逃れる形で帰国し、翌年の第28回二科展に《痛ましき腕》を発表した。しかし、1942年に現役初年兵となり、1946年の終戦まで中国の収容所で生活した。兵役中、青山の自宅が空襲に遭い、《痛ましき腕》を始めパリ時代の多くの作品を失った。復員後、芸術活動を再開し、「夜の会」や「アヴァン

ギャルド芸術研究会」を結成、また『岡本太郎画文集アヴァンギャルド』を出版する等、日本でも前衛芸術運動を展開した。復員後の1947年には二科会会員に推挙された。1954年に出版した『今日の芸術』<sup>(1)</sup>が美術の啓蒙書として異例のベストセラーとなり、その後も、「伝統論」として括られる『日本の伝統』<sup>(2)</sup>や『日本再発見－芸術風土記』<sup>(3)</sup>、『忘れられた日本〈沖縄文化論〉』<sup>(4)</sup>、『神秘日本』<sup>(5)</sup>など数多くの著作を刊行、発表した。1967年、56歳の時、日本万国博覧会のテーマ館展示のプロデューサーに就任し、1970年開館の万博に向けて、代表作の《太陽の塔》や《母の塔》、《青春の塔》の制作を含むテーマ館の企画、設置を行なった。1967年には、その他、メキシコのホテルのオープンに合わせた巨大壁画の制作依頼を受け、《太陽の塔》の姉妹作品として《明日の神話》の制作に着手した。しかし、ホテルはオープンせず、同壁画は2003年まで行方不明となっていた。万博以降は、テレビ番組やCMに出演し、その存在が大衆に広く認識されるようになっていたが、1996年、パーキンソン病による急性心不全で84歳で没した。

以上の略歴から分かるように、岡本は戦後の日本で前衛芸術家として作品を制作するだけでなく、著作の刊行やメディアを介しての一般大衆に対する美術の啓蒙活動によって賛否両論の批評の対象となるとともに、当時の美術界や社会に多大な影響を与えた。その影響は、没後20年経った今日にまで及んでおり、今なお岡本に焦点をあてた展覧会や映像作品、雑誌の特集が企画

され続け、さらに様々な学問領域からのアプローチもなされ続けている。しかし、岡本に関する様々な先行研究を概観し、どのような研究者が岡本のどのような点を問題とし、どのような方法でどこまで研究を進めているのかについて分析した研究は見出されない。そこで本稿では、岡本に関する先行研究を可能な限り洗い出して概観することで、岡本を研究対象としている学問領域や研究者、研究の現状、並びに未解決事項を明らかにし、稿者が今後岡本研究を進める上での指針としたい。

概観、分析の方法としては、研究者の学術上の専門分野を調べ、それらを大きく四分野、すなわち「美術批評家・美術史家」、「社会学者・哲学者・思想史学者」、「美術教育学者」、「その他の分野」に分け、それぞれの分野ごとに論考を整理し、発表、発行年順に列挙しながら、それらの内容を検証する方法を採用する。なお、岡本については、学術論文以外にも、膨大な評論や新聞記事などが書かれているが、紙幅の都合上、本稿では、評論や論説等については数例を挙げるに留める。また、岡本存命中には、彼に関する学術論文は管見の限り見出し出されないため、主に岡本没後の1996年から2017年までの学術論文を中心に検証していくことにする。

## 1. 美術批評家・美術史家による先行研究

### 1-1. 美術批評家による先行研究

岡本太郎に関する美術批評は、岡本が死後、芸術家として再評価されるのと並行して、1996年頃から盛んになるが、美術批

評家による本格的な学術論文は皆無に近い。

批評としては、1998年から2000年にかけて、日向あき子氏が『版画芸術』に連載した「岡本太郎ルネッサンス」<sup>(6)</sup>が挙げられる。同氏は、全8回の連載の中で、岡本の幼少時の家庭環境から始めて、青年期の母との関係、パリ在住時の活動、ニーチェ哲学からの影響、戦後の芸術活動、《太陽の塔》の制作と、岡本の半生を辿ることで、既に伝説の人となりつつあった彼の実像を掴もうとした。

また『中央公論』には、2002年から2003年まで、榎木野衣氏が「黒い太陽と赤いカニ——岡本太郎と日本」<sup>(7)</sup>を全13回に亘って連載している。岡本を、「輝かしい功績だけでなく、解決しようのない絶望や内なる空虚さ、そして取り返しのつかない失敗についても、同じくらい重視して、語ろうと考えている」<sup>(8)</sup>とした同連載で、榎木氏は、1970年以降の岡本とメディアとの関係や、彼の思想に影響を与えたバタイユやヘーゲル、コジェーヴと岡本との関係、岡本の伝統論、岡本とマンガとの関係、太陽の塔等を論題としながら、岡本の全体像に迫ろうとしている。

その後、2007年には、『東北学』と『國文學』が、岡本没後10周年に向けた特集を組んでいる。『東北学』には、「明日の岡本太郎」<sup>(9)</sup>と題した特集中に、酒井忠康氏や針生一郎氏と民俗学者の赤坂憲雄氏との対談や、石井匠氏などによる彼の著書についての批評が掲載されている。『國文學』は、「家族の肖像——岡本太郎・かの子・一平」と題する特集を組み<sup>(10)</sup>、岡本自身や

母かの子、父一平それぞれに関する論説を掲載した。二誌に寄せられた美術批評家や美術史家、芸術家だけでなく、考古学者や民俗学者、フランス文学者、日本文学者など、多方面の有識者による論説からは、21世紀に入っても多くの人々が岡本の活動に関心を持っていることが窺われる。

同じ2007年には、唯一確認できた学術論文である「日本文化に於ける土俗と現代——岡本太郎を手がかりにして」<sup>(11)</sup>を、柴橋伴夫氏が発表している。同論考は、岡本の美術家としての側面よりも、思想家としての側面に着目し、岡本を、日本文化の根底に流れる土俗的、言い換えれば縄文的なものを発見した人物とみなしている。そして、その縄文的なものの発見を可能とした岡本の観察眼はどのように養われ、また、岡本が発見し評価した縄文的なものが、いかに革新的なものであったかを示すことを目的としている。柴橋氏は、方法として、岡本の観察眼の形成場所をパリと同定し、①パリ時代に修得した文化人類学的視点に基づく岡本のパリでの行動を整理、分析し、②帰国後、日本文化における土俗として縄文を発見した時の状況を整理、分析している。また、③縄文を発見した観察眼が他で用いられた例として、岡本が書いた『忘れられた日本〈沖縄文化論〉』を取り上げている。同氏は、岡本を沖縄学を意識した最初の人物であり、沖縄学を通して、広義の文化人類学の確立を試みた人物と結論づけている。

次いで2011年には、岡本生誕100年を記念して『美術手帖』、『芸術新潮』、『別冊太陽』、『すばる』がそれぞれ特集を組んでい

る。『美術手帖』の「生誕100年記念特集 岡本太郎」<sup>(12)</sup>は、岡本に関わりのある言葉（「芸術は爆発だ!」、「太陽の塔」、「対極主義」、「パリ時代」等）として選ばれた10の用語に対して寄せられた美術の識者の論説が掲載している。「生誕100年記念大特集 岡本太郎を知るための100のQ&A」<sup>(13)</sup>を企画した『芸術新潮』には、上述の『美術手帖』同様、識者が寄稿している。『別冊太陽』は、「岡本太郎新世紀」<sup>(14)</sup>と題し、幼少期からの生涯を、とりわけ著述活動に比重を置きながら辿っている。他方、「岡本太郎 爆発は永遠だ」<sup>(15)</sup>と題した特集を組んだ『すばる』には、美術批評家の論説は殆んど寄稿されていない。その代わりに、芸術家や芸能人が岡本について語ったインタビュー記事や、文化人類学者など他分野の研究者による論説が寄せられている。

## 1-2. 美術史家による先行研究

美術史分野は、他の研究分野に比べ、当然ながら岡本太郎とその芸術に関する論評や論考の数が最も多い。

最初の学術論文としては、2001年に春原史寛氏が発表した「岡本太郎《太陽の塔》の研究」<sup>(16)</sup>が挙げられる。同論考で、春原氏は、日本万国博覧会に展示された岡本の代表作《太陽の塔》を取り上げ、万国博における同塔やテーマ館の意義、万国博参加に際して岡本が考えていたこと、《太陽の塔》の色彩や造形表現の意図、さらには同塔のモニュメント性など、多角的な視点から考察を行っている。そして同氏は、万国博後、大部分の建造物が消えてしまっ

た会場に今も立っている《太陽の塔》について、万国博の後でも大衆を巻き込み、何らかの影響を後に残すことができたのは同塔だけだとし、同塔の制作を含め、自身の芸術論を一貫して実践し続けた岡本の態度を何よりも評価すべきだとしている。

続いて、2007年に小金沢智氏が発表した「岡本太郎『今日の芸術』考——本日に、今日の芸術は、うまくあってはいけないのか？」<sup>(17)</sup>が挙げられる。同論考は、岡本の著作である『今日の芸術』が何を目的としたものであり、また、題名にもある「今日の芸術」が彼にとってどのようなものであるのかを考察したものである。小金沢氏は、1950年代の岡本の自筆記事や彼が参加した座談会や対談、新聞に掲載された書評、また、『今日の芸術』が発刊された1954年前後の岡本と彼の周辺の動きを整理しながら考察を行なった。そして最終的に、同氏は、岡本は、創造的な活動においては規範や権威は絶対的なものではなく、逆転可能なものであり、むしろそこからしか想像的なものは生まれないと考え、新たな価値観を生み出す実践として、「今日の芸術は、うまくあってはいけない。きれいであってはならない。こちよくあってはならない」<sup>(18)</sup>という当時の芸術界の規範的な価値観を否定する言葉を敢えて使って行動し、『今日の芸術』を通してそれを伝え、芸術を大きな運動にしていきかけたのだと結論づけている。

続いて翌2008年には、春原氏が「岡本太郎「縄文土器論」の背景とその評価——戦後日本の「美術」と「縄文」をめぐる動向についての一考察」<sup>(19)</sup>を発表する。同論

考は、岡本が「四次元との対話 縄文土器論」(『みづゑ』1952年)<sup>(20)</sup>や「縄文土器—民族の生命力」(『日本の伝統』光文社1956年)<sup>(21)</sup>といった論考を中心に展開した「縄文土器論」が、いまだ美術界に位置付けられていないとし、位置付けの一方法として、戦後の社会と美術史学における岡本の縄文土器論の具体的な評価と、その受容過程の解明を試みたものであった。そして春原氏は、縄文土器の考察を、従来の考古学的側面からではなく美術的側面から展開していく岡本の縄文土器論の影響が、美術家から大衆へ波及していくにつれ、縄文土器を美術品とみなす見方が一般化していったが、そうした見方が定着するに伴い、逆に岡本の縄文土器論の先鋭性は本質的に検討されることなく希薄化していったとする。また、美術史に対する縄文土器論の影響については、縄文土器を単純に美術として分析する現在の状況自体が、縄文土器論の美術史に対する影響の結果であるとしている。さらに同年、同じ春原氏は、「岡本太郎《太陽の塔》をめぐる言説——その受容と評価、日本万国博覧会と美術・建築・デザイン」<sup>(22)</sup>をも発表する。同氏は、岡本の重要な立体造形作品《太陽の塔》に着目し、当時(2008年)までの段階で、その造形性などに関する総括的な研究は既に行われているものの、同作品がどのように社会に受容、評価されているのかについて考察した論考は殆んどないとし、《太陽の塔》についての記載がある日本万国博覧会前後の出版物の言説から、同作品に対する一般社会の評価と、美術家などの専門家の評価の再構成を試みた。なお、再構成に際

して春原氏は、検証範囲を美術だけではなく、デザインや建築分野にまで広げている。そしてまとめとして、一般社会、特に子供達には、日本万国博覧会入場者に対するアンケート結果等から、好評であったものの、専門家たちには、いずれの分野の出版物も《太陽の塔》を批判しているため、不評であったとした。さらに三分野を比較した場合には、デザイン雑誌や建築雑誌に比べ、美術雑誌では批判の論調が弱いため、美術分野は岡本を半ば無視していたとしている。同氏はさらに、今後の《太陽の塔》の研究課題として、岡本の一連の美術作品と本作品との造形上の関係や、岡本が絵画や彫刻作品に求めていた本質的な造形上の考えについて考察した上での《太陽の塔》の位置付けを挙げている。

続いて2009年には、大谷省吾氏によって「岡本太郎の“対極主義”の成立をめぐる」<sup>23</sup>が発表された。大谷氏は、同論考の中で、岡本の対極主義については未だ十分に考察されていない課題があるとし、それは、①当時の西洋絵画における抽象絵画とシュルレアリズムの二極化に対して岡本が提唱した対極主義が、彼特有のものであったのか否かという点、そしてもし他の芸術家たちの共有するものであったとした場合、岡本と他の芸術家たちとの間に思想的差異は確認されるのか否かという点、次いで、②岡本による対極主義の提唱年（1948年9月か1947年か）の検証を含めた対極主義の成立過程についての詳しい分析、そして③1947年までの岡本の対極主義の雛形とも言える思想から1948年における対極主義の明文化へと至らしめた要因

が何であったのか、という3点を挙げている。そして、これらの課題に対し、同氏は、岡本のパリ時代の作品や彼が当時書いた文章中に見られる対極主義の下地の確認を行った後、戦後の岡本の文章を分析し、論旨が変化する過程を考察することで、岡本の対極主義の思想に深化を与えた人物の特定を試みている。同氏によれば、対極主義を1948年に明文化させるに至った要因は、文芸評論家の花田清輝との関係であり、1948年1月に花田と岡本が中心となって結成した芸術研究会「夜の会」での議論が、同年8月における明文化に対し重要な役割を果たしたことになる<sup>24</sup>。

同じ2009年、岩田ゆず子氏も「岡本太郎の旧東京都庁壁画をめぐる考察」<sup>25</sup>を発表している。岩田氏は、同論考で、《太陽の塔》や《明日の神話》等のパブリックアート制作の端緒となった旧東京都庁の《日の壁》を始めとする11面の巨大壁画作品<sup>26</sup>について、巨大壁画が東京の行政府に設置されるに至った背景や同作品の造形性などについて考察している。岡本の作品に関する先行研究は、《太陽の塔》と《明日の神話》に集中しているため、同論考は、岡本の他の作品について論じた数少ない学術論文と言える。岩田氏は、同壁画を、「団体活動と個人活動の双方の間で揺れ動いた時代の代表作品」<sup>27</sup>とし、また「太陽をはじめそれまでの岡本の代表的モチーフがここでほぼ揃った分岐点」<sup>28</sup>としている。

次いで2011年、佐々木秀憲氏によって「岡本太郎にみるミルチャ・エリアーデの影響」<sup>29</sup>が発表される。同氏は、従来の岡

本研究では、彼がパリに滞在していた時期が考察対象とされてきたとし、同論考では、それまで全く考察されてこなかった、岡本が戦後に習得した思想に関する考察を行なっている。方法として、佐々木氏は、川崎市岡本太郎美術館所蔵の岡本旧蔵のフランス語書籍約400冊の調査を行い、戦後に入手された書籍であり、また、他書籍に比べて多数の傍線や下線、書き込みが確認される書籍の著者であるミルチャ・エリアーデを取り上げ、エリアーデの書籍が岡本の思想に与えた影響を考察している。そして、岡本が『芸術新潮』に寄稿した文章に登場する「ヒエロファニー」という用語がエリアーデの提唱した言葉であったことや、エリアーデの著作が彼の知識の源であったこと、また《太陽の塔》を始め、彼のモザイク画やタイル画、絵画作品の造形に、エリアーデが著作内で用いた用語や思想が見られることを根拠に、1950年以降の岡本の創作活動はエリアーデの著作から着想を得て展開されたものと結論づけている。

同じ2011年には、志賀祐紀氏による「岡本太郎の「前衛」——『岡本太郎関連記事 1949 No.1』から」<sup>30</sup>も発表される。志賀氏は、岡本旧蔵のスクラップブック『岡本太郎関連記事』（川崎市岡本太郎美術館蔵）の全ページを川崎市岡本太郎美術館が撮影して製本し直した最初の巻である『岡本太郎関連記事 1949 No.1』に収録されている1946年から1949年までの記事に基づいて、当時の岡本の動向や彼に対する評価を再考している。そして同氏は、当該の4年の期間について、「岡本は

日本の過去を徹底的に批判し否定し、過去の残骸である既成勢力を打破すべきであると激しく主張し続け、さらに四面楚歌の孤独な状況で戦っていると言いつづけた」<sup>31</sup>としている。しかし、当時の日本では日本の過去と既成勢力を否定する論調が、また、西欧では既に「前衛芸術」（アヴァンギャルド芸術）が主流となっており、岡本にとっては順境とも言える状況にあった。にもかかわらず岡本が逆境にあると主張し続けた理由として、志賀氏は、「前衛」という言葉の意味とそれがもつ矛盾に岡本が気付いていたことと、当時の西欧ではもはや「前衛」という言葉が使われなくなっていたことを挙げている。また、当時の日本では「前衛芸術」は主流ではなかったため、日本に限定すれば、字義通り「前衛」が成り立つとして、岡本は、独自の定義で「前衛芸術」の成立を試み、自身が「前衛」であるために四面楚歌の孤独な状況を主張し続けなければならなかったのだとしている。続いて同じ志賀氏は、同年中にさらに「岡本太郎の「光琳論」：「前衛」の流行と展開」<sup>32</sup>と題した論考も発表している。同論考では、前稿で着目した期間に続く1950年代初頭の岡本の動向が考察対象とされている。同氏によれば、1950年代初頭には日本でも「前衛芸術」が浸透して芸術の主流となっていくが、そうした状況は、主流の打破を担う「前衛」を主張していた岡本にとっては窮地に等しかったため、自身の「前衛」の立場を保持するための次策として、岡本は「光琳論」を発表したのだという。つまり、当時の日本には古美術に対して因襲的な鑑賞方法が定着して

いて作品本来の本質や価値が見出しえない状況にあるため、岡本は、その打破を主張することで、古美術における因襲的（=主流）な鑑賞法の打破を担う自身の「前衛」的立場を保とうとし、「因襲的」な鑑賞者である専門家たちに理解されていない例として光琳作品を取り上げたのだという。

続いて2013年には、篠原華子氏が「岡本太郎における装飾：「光琳論」と「縄文土器論」からみる空間性」<sup>33</sup>を発表する。同論文では、『日本の伝統』内で岡本が展開した縄文土器と光琳絵画の装飾の分析を中心に、美術と装飾の関係性が考察されている。篠原氏によれば、17世紀以降の西洋絵画の核は「物語」と「リアリズム」であったが、「19世紀後半から、絵画における「物語」と「リアリズム」が解体していく」<sup>34</sup>ため、岡本は、その核を失った絵画の穴を埋める媒体として「装飾」を取り上げ、絵画における「物語」の欠如と空間の処理という問題に対し、「装飾」という観点からだけではなく、物事に即反応する精神を捉えるという意味でのリアリズムを導入して、西洋近代絵画の問題の打破を試みたという<sup>35</sup>。

また同じ2013年には、再び志賀氏によって「岡本太郎の「伝統論」に関する一考察」<sup>36</sup>が発表される。同論考は、日本美術の主流や過去を否定し、前衛作家であることにこだわった岡本が、1950年代には「光琳論」<sup>37</sup>や「土器論」、「中世の庭園」<sup>38</sup>といった日本の伝統に関する論考を展開した理由について考察したものである。志賀氏によれば、岡本は、従来主流の打破を担う「前衛芸術家」として、当時日本の

伝統とされていたものや既成概念を打破して新たに伝統を捉え直すべきだとし、また、「既存の評価によらずに「現在」の人々が自らの感覚で主体的に「伝統」を捉えるべき」<sup>39</sup>だとして、自身の前衛芸術家としての立場を貫いた。また、志賀氏は、岡本は過去のものである「古典」も、創作された当時あっては前衛的な作品であり、それを改めて打破することで新たな価値あるものを創造できると論じ、「古典」を現在においても価値あるものとして位置付けたとしている。志賀氏はさらに、同年中に、「前衛」岡本太郎の位置：一九四〇年代後半から一九五〇年代初頭における変遷」<sup>40</sup>をも発表する。同論考は、1940年代後半から1950年代までの著作において、岡本が主張の対象を美術の専門家から次第に一般大衆へ変化させた理由を、当時の彼の著作に見られる主張や彼を取り巻く状況、彼に対する周囲の評価を確認することで明らかにしようとしたものである。そして志賀氏は、当時は美術評論家等の識者たちに前衛に対する共通の見解がなかったり、第二次世界大戦後、日本画壇が国際舞台に復帰する際、外国での評価を気にして弱腰であったりして混乱している状況の中、岡本は芸術の新たな評価者として大衆に着目したのだとしている。さらに翌2014年、同じ志賀氏は、今度は「岡本太郎『日本再発見：芸術風土記』に関する一考察：新たな「日本文化」像構築の手段と狙い」<sup>41</sup>を発表する。同氏は、岡本の著作『日本再発見：芸術風土記』に対して、榎木野衣氏や赤坂憲雄氏が「岡本が地方で見出そうとしたのは、「日本」という一つの



枠には収まらない、または既存の「日本の伝統」像にはあてはまらない多様な日本文化のあり方、そしてその成り立ちである」<sup>42)</sup>と述べた点に着目し、同論考内で同書の主張を再検討するとともに、同書の発刊当時における受容状況が未だ整理も研究もされていないことを指摘している。志賀氏によれば、岡本は、日本の「現在」と「過去」を肯定しうるものとして再発見したと述べることで、可能性と希望のある新たな「日本」像を構築しようとしたが<sup>43)</sup>、その主張は独創的な芸術家が唱えた独特な日本文化論とみなされ、当時の日本文化論の主流とはなりえなかったのである。

続いて2014年、再び春原氏によって「岡本太郎『今日の芸術』(1954年)とその読者：美術出版による専門家からの美術の解放」<sup>44)</sup>が発表された。同氏は、岡本の著作『今日の芸術』を美術史に位置付けるに当たり、従来の先行研究では検討が不十分であった①『今日の芸術』とその他の岡本の著作との関係性や、②岡本の著作と他の著者の同系統の著作との比較、③当時の出版界の状況との関連について考察するとともに、彼が対象とした読者について考察している。そして春原氏は、『今日の芸術』は、美術の啓蒙ではなく、美術の有識者の手からの解放と枠の解体を志向しているため、もはや芸術書の枠で捉えるべきものではないとしている。翌2015年にも、春原氏は「岡本太郎の多面的活動に関する一考察：雑誌・新聞・テレビとの関わりをめぐって」<sup>45)</sup>を発表し、岡本が出演していたテレビ番組と彼との関わりや、多岐に亘る雑誌や新聞への寄稿の傾向を検証するこ

とで、著作者としての岡本の多面性を考察している。岡本の文章は、特に1950年代初めから1960年代後半にかけて、広範な雑誌や新聞を介して多くの人々の目に触れたが、その後は、同氏によれば、「1970年の日本万国博覧会における《太陽の塔》と、それをきっかけとした、以降のテレビへの頻繁な登場により、文字から映像へと展開」<sup>46)</sup>していく。このようなプロセスが、「岡本による「芸術家」イメージの生成過程」<sup>47)</sup>には存在していたのである。さらに同じ2015年に、春原氏は「岡本太郎の評価と岡本一平・かの子の社会における受容の関連についての一考察」<sup>48)</sup>をも発表している。同論考は、当時の岡本に対する評価に、父・岡本一平(漫画家)と母・岡本かの子(歌人、小説家)の当時の社会における受容状況がどのように関連していたのかを考察したものである。同論考では、岡本が戦後の1947年に異例とも言える速さで芸術家として再出発できたのは、一平の助力を得てかの子の著作物の挿絵を描いたり雑誌に文や絵を寄稿したりしたためであり、戦前までに形成されていた父母のイメージの力を借ることで岡本は評価を獲得していったとされている。

2015年には、その他、鈴木希帆氏が「岡本太郎の縄文土器論：発見の場としての博物館」<sup>49)</sup>を発表している。鈴木氏は、従来の岡本研究では、彼が「縄文」を発見するに至った知的背景は研究されてきたが、発見現場となった日本の博物館サイドの当時の状況については検証されていないとし、同論考において、岡本が「縄文」を発見したことで起こった日本美術史への石

器時代の導入に対して果たした博物館や展示の役割を検証している。

続いて2016年、再び春原氏によって「岡本太郎の伝統論の展開とその受容：『日本の伝統』『日本再発見』『沖縄文化論』『神秘日本』に注目して」<sup>50</sup>が発表される。同氏は、岡本が自著である『日本の伝統』や『日本再発見—芸術風土記』、『忘れられた日本〈沖縄文化論〉』、『神秘日本』内で展開した伝統論は、美術だけでなく、人文諸科学に関連しているため、研究者たちに特に注目されてきたが、その見解は必ずしも統一されておらず、中でも伝統論の受容のされ方については研究が不十分だとして、同論考で彼の伝統論の系統を辿り、その総体の把握と変遷の考察、また受容の側面を明らかにしようとしている。そして、岡本の伝統論は、「前衛芸術家の目を、専門家ではない一般読者に共感させたという意義」<sup>51</sup>を持つものであったと結論づけている。春原氏はさらに同年、「岡本太郎研究：戦後日本美術の受容と芸術家イメージ」<sup>52</sup>も発表している。同論考は、戦後一貫して一般大衆に芸術の啓蒙活動を行った岡本の社会における受容についての総括的な考察となっており、2016年までの同氏の研究成果を収めた論考であるため、資料的価値が高い論考でもある。同氏は、戦後の日本の美術受容史における美術書出版の位置付けや、美術の啓蒙活動家に対する当時の社会の評価の解明の対象者として、岡本を取り上げ、彼が著書やテレビ出演などによる啓蒙活動を通して大衆に提示した「芸術家」像と、大衆が実際に受け取った実相について考察している。同氏

は、啓蒙活動を行う岡本にとって、大衆との直接的接点が保証されるメディアへの出演は必然的なものであったが、結果的に私生活の全てを芸術に捧げてそれに打ち込む普遍的な「芸術家」像が大衆に定着してしまい、むしろ「芸術家」には距離を置いて接するべきだとする誤解を生じさせたとしている。

## 2. 社会学者・哲学者・思想家による先行研究

### 2-1. 社会学者による先行研究

社会学分野では、岡本没後の1996年以降、論評が若干確認されるが、学術的な研究と言えるものは、2000年以降にしか見出し出されない。

まず、最初の論考としては、2002年に縄井杏子氏が発表した「岡本太郎の日本社会観——ライフヒストリー」<sup>53</sup>が挙げられる。縄井氏は、研究対象になった人物の人生を叙述するライフヒストリー法を採用し、当時の文化史と個人の人生との関連を比較検討しながら岡本の日本社会観について分析、考察している。そして、岡本が誕生した明治時代から、テーマ展示のプロデューサーを務めた日本万国博覧会までのライフヒストリーを分析した後で、幾つかの結論と今後の課題点を挙げている。縄井氏の論考以外の先行研究で既に指摘されているものもあるが、「太郎は「自らの作品」を宣伝したいのではなく、彼は「対極」を示すためのツールとして、作品を日本社会に提示していきたいと考えていたのである」<sup>54</sup>という指摘は特筆される。

続いて2004年から2005年にかけて、犬

飼裕一氏が「思想家 岡本太郎 上、中、下」<sup>55)</sup>を發表する。同論考は、岡本の多面的な活動の中でも、著作面に焦点を当て、芸術家としてではなく、思想家としての岡本について考察している。同論考の目的は、「『岡本太郎』という現象をめぐって当人自身とその他の人々が何を考えていたのかを理解すること」<sup>56)</sup>であり、①岡本を思想を主に彼自身の著作から取り出し、また、②知覚社会的にアプローチすることで、岡本が同世代以降の日本社会においてどのような位置を占め、どのように扱われ、また、どのような機能を果たしているかを考察している。飼氏によれば、「思想家」としての岡本についての研究は未開拓であり、同論考では、主眼は、②の「知覚社会学による考察」に置かれている。そして同氏は、思想家としての岡本は、芸術家は作品を作り、社会は芸術家の作品や芸術家自身を批評、研究、分類するというのが、ごく一般的であった当時の日本において、批評されるべき芸術家でありながら、批評や研究、分類を行うという「異端」を犯し続けることで、分業化と専門化が進む現代の社会制度が拡大させつつあった研究者と実作者との間にある壁の問題を突きつけていたのだと総評している。

次いで2016年には、西脇和彦氏によって「岡本太郎の方法論に関する社会学的一考察：ホットな弁証法によるBreakthrough」が『学苑(911)』<sup>57)</sup>に發表された。西脇氏は、同論考において、岡本の経歴分析と、主に岡本のパリ留学時代に当たる1930年代のフランスの社会思想についての分析を通し、これまで考察されて

こなかった岡本の社会学徒としての一面について考察している。そして同氏は、他の研究では指摘されていない哲学者カール・マルクスの岡本への影響について指摘し、当時の人々にとってマルクス主義は避けては通れない課題であり、マルクス主義的世界観の基礎をなす史的唯物論とその史的唯物論を含む弁証法の論理が岡本思想の原点を形成したと推察している。さらに結論においては、岡本の弁証法は、従来の理性的な弁証法に対して感性的、表出的表現を優先して情緒的、非合理的側面を含んでいるため、従来の弁証法を「クールな弁証法」とすれば、岡本の弁証法は「ホットな弁証法」と言えるとして、両者を差異化している。

## 2-2. 哲学者による先行研究

哲学分野における岡本太郎研究は、当然ながら思想に着目した論評が多い。学術論文は、管見の限り、伊藤徹氏によるものしか見出しされない。その論考は、2010年に『京都工芸繊維大学学術報告書4』に掲載された「岡本太郎・主体性の神話－対極主義とその亀裂」<sup>58)</sup>である。同論考は、岡本思想面、特に独自の思想である「対極主義」に焦点を当て、岡本のパリ留学時代から第二次世界大戦期を経て戦後の多方面に亘る活動期までの半生を辿りながら、彼の対極主義の形成や同思想を日本で提唱した経緯、また、前衛作家として対極主義を展開することで縄文文化を始めとする日本の伝統文化と彼自身との間に生じた関係を分析している。伊藤氏は、岡本の対極主義には主導的概念が内在しており、それは思

想史家の丸山眞男や中国文学者の竹内好が目指した「〔個人〕の〔主体性〕の確立」<sup>59)</sup>に等しいとする。また、対極主義の主体は、合理主義と非合理的なエネルギーという矛盾する要素を結び合わせ、そこから生じた新たなエネルギーに己自身を否定的に展開させて行く「この自己否定の運動こそが、対極主義的主体の存在根拠であり、「レアリテ」をなす」<sup>60)</sup>としている。そして結論中では、岡本の主体の限界にも言及し、彼の芸術は近代文化・社会への抵抗であったが、抵抗である以上、抵抗者に依存せざるをえないものであり、この問題が岡本の前に現前した具体例として、『忘れられた日本〈沖縄文化論〉』中に記された岡本の体験を挙げている。同じ伊藤氏は、続いて2014年の「主体性の概念とその淵源」<sup>61)</sup>と題した論考では、2010年の論考で扱った西洋近代の基幹概念“Subjektivitat”の訳語として使用された「主体性」の本質と、その精神史的な由来の探求を目的とした。そして同氏は、「主体性」という言葉が、戦後の知識人の間で流行した多義的なジャーゴンであったことを示す例として、様々な人々の「主体性」の概念を示しているが、それらの中で岡本は、特異な主体性概念を用いた人物の一例として挙げられている。

### 2-3. 思想史学者による先行研究

思想史学における岡本研究の最初の論考としては、2006年に篠原敏昭氏によって発表された「ベラボーな夢——岡本太郎における祭りと万博」<sup>62)</sup>が挙げられる。篠原氏は、岡本が日本万国博覧会で演出しよう

としたのは、万博が打ち出していた「人類の進歩と調和」ではなく、未開社会の中で行われてきた神秘的で神聖なものとの合流を目的とした世界の「祭り」であったとする。そして、岡本が「祭り」を企画するに際し、万博と「祭り」という本来別々の物事に対し、如何に折り合いをつけて企画したかや、彼が構想した「祭り」は実現できたのか否かについて考察し、結論として、岡本自身は当時、「祭り」としての万博は成功したと見なしていたものの、「祭り」の企画にしか取り組めていないため、構想は実現できなかったとしている。

次いで2007年には、塚原史氏によって「岡本太郎とバタイユ——太陽の塔解説の試み」<sup>63)</sup>が発表された。塚原氏は、岡本が《太陽の塔》を制作するに当たって、何を意図していたのかを解明点に掲げ、同塔を、自身と一平、かの子を表現した父母と子の像であると解釈した。より具体的には、《太陽の塔》の造形は、パリ留学時に交友関係にあつて、岡本に影響を与えたジョルジュ・バタイユの思想や、岡本自身がバタイユについて述べた文章を根拠に、日本万国博覧会という「祝祭のために、生贄として首を切断された母なる太陽と、母が生死の境を越える瞬間に産み出そうとしている子である新たな太陽の像であり、後方の太陽は母子を背後から護衛するかのような亡き父としての太陽」<sup>64)</sup>だとしている。さらに塚原氏は、同じ年に『東北学』に寄稿した「岡本太郎とマルセル・モース——一九三〇年代パリとミュゼ・ド・ロム」<sup>65)</sup>において、岡本の思想に影響を与えたとされるマルセル・モースの講義等、未

解明なパリ時代に関する課題について指摘している。岡本のパリ時代に関しては、例えば、彼自身が30年代にパリで書いたフランス語のテキストがまったく知られておらず、また、同時代のフランス側からの岡本に関する直接的言及があまりにも少ないことが、課題として挙げられている<sup>66</sup>。そして同氏は、モースの講義の受講時の岡本のノートや、当時の同級生のノートが見い出されれば、モースの授業の概要が明らかになるとともに、従来の推測の域をはるかに超えた新知見が得られるとしている。

2016年には、岩野卓司氏が「『戦い』としての芸術：岡本太郎の聖なる根源」<sup>67</sup>を発表している。同論考は、岡本の思想家としての活動に注目し、大阪万博や狩猟文化、戦争画、「明日の神話」といったテーマを取り上げながら、彼が提唱した「対極主義」について分析し、対極主義に内在する根源的な「戦い」の意味を明らかにしようとしたものである。岩野氏によれば、岡本は、人間の根本には「戦い」が存在し、それが現実を動かしていると考え、また、「対極主義」を、物事を芸術の中で対極に引き裂き、引き裂かれたそれぞれが芸術の中で火花を散らして闘争し続ける「戦い」と考えていたという。

### 3. 美術教育学者による先行研究

教育分野における岡本太郎研究としては、まず2003年に、隅敦氏によって「美術館での作品鑑賞を表現に生かす授業実践に関する考察：岡本太郎の連作をつくる実践を通して（教科教育・教材研究・教育方

法）」<sup>68</sup>が発表された。同論考は、山口大学教育学部附属教育実践総合センターがこれまで定期的に秋に行なっていた、小学6年生対象の広島県広島市内の美術館訪問（広島市現代美術館、ひろしま美術館、広島県立美術館のうち2館を訪問）を通しての鑑賞教育の新たな展開として試みた、美術館における作品鑑賞に基づく作品制作表現について論じたものである。具体的には、平成13年に広島現代美術館で開催された「岡本太郎と縄文」展を見童に見学させた後、岡本が縄文土器から影響を受けて作品を制作したように、見童にも岡本から影響を受けた作品を同センターが制作させた事例について述べられている。隅氏は、論考中で岡本を、「芸術を大衆へと広め、マスコミにもたびたび登場していた。その親しみやすい性格も相まって、子ども達にとっても、なじみやすい作家であると考えられる」<sup>69</sup>とし、また岡本を題材とすることで、彼の作品を通して縄文土器の造形美にも心を寄せて欲しかったと述べている。

続いて、2007年には、蝦名敦子氏が『芸術文化』において「縄文・棟方志功・岡本太郎——鑑賞教育の題材化の検討」<sup>70</sup>を発表している。同論考は、岡本を美術の鑑賞教育に用いて教材化を目指す上での最初の段階としての「題材化」について検討したものである。蝦名氏は、以前から、地域（青森県）の文化財を活用した鑑賞教材の開発について研究しており、特に縄文文化と棟方志功に着目していたが、さらに縄文文化がもつ芸術的意味を見出した最初の人物として岡本を取り上げ、縄文、棟方、岡本それぞれに見られる共通性を考察する

ことで、鑑賞教材の題材化を試みようとした。そして同氏は、岡本を美術鑑賞の題材の対象にするに際して、作品よりも思想、特に彼の美意識や作品との対峙の仕方や鑑賞方法に着目しながら考察を進め、結論として、それら三者を題材化すれば、岡本の縄文観からは鑑賞とは何か、また、棟方の造形や岡本の縄文土器論からは、現代から見た縄文の芸術的特性が理解されるとともに、棟方や岡本の美意識や美的価値観にも触れられるとしている。

教育学者による研究の中にも、岡本の思想面に着目した論考がある。2011年に安井健氏が発表した「岡本太郎によるジョルジュ・バタイユの思想の継承と決別」<sup>(71)</sup>がそれである。同論考は、岡本の思想に影響を与えたとされるフランスの哲学者ジョルジュ・バタイユの思想と岡本との接点や、影響を受けていた時期から決別に至るまでの経緯を、バタイユの活動にも言及しながら丹念に検討、考察をしている。同氏は、現段階（2011年）における岡本太郎研究では、芸術家としての岡本の再評価は進んでいるが、思想家としての岡本に焦点を当てた研究は殆んどなく、研究はまだ緒に付いたばかりであるとし、岡本独自の思想である「対極主義」がどのような思想と影響下に生まれたのかについて解明を試みている。バタイユは、不可知で非合理的な領域を核として、最終的には西洋の合理的「主体」を否定する、「自己否定」を含む「脱主体」の理論を展開することになる。岡本の「対極主義」もまた、対極の矛盾に引き裂かれ同一を保てない点で、合理的な「主体」という考えに合致しない「脱主体」と

考えることができる。しかし、同じ「脱主体」でも、岡本は、バタイユの「自己否定」とは異なり、「否定」を契機に「自己」を肯定していくことになる。岡本は、自分ではなく社会に「否定」を突きつけ、また社会からも「否定」を突きつけられることで、自身の存在意義を見出しているのである。安井氏は、岡本の「対極主義」は、その点において、徹底的な「自己否定」によって自己を完全に解体してしまうバタイユの「脱主体」とは異なるタイプの「脱主体」論となっているとする。

続いて2016年には、金山愛奈氏と向野康江氏によって、従来注目されることのない岡本の美術教育思想について考察した「岡本太郎（1911～1996）の児童画に対する要求水準について：『児童画評価シリーズ2』を手掛かりに」<sup>(72)</sup>が発表された。同論考は、美術教育分野から岡本の再評価を試みたもので、岡本が参加していた『児童画評価シリーズ2』について、岡本が評価した児童画と、同書の他のメンバー（井手則雄、久保貞次郎、国分一太郎、竹内清、藤沢典明、山形寛）の評価を比較しながら、岡本が児童画に求めた水準を推察するとともに、岡本が良い絵とした具体例の確認作業を行なっている。岡本は自著『今日の芸術』の中で、子どもの絵に対する自身の考えをまとめてはいるが、その中に記載されている「良い絵」が実際にはどのような作品を指すのかについては記していないため、両氏は岡本が参加していた児童画評価を中心に検証し、岡本の児童画審査に対する考え方と彼の評価の特徴について考察している。そして結論として、岡本は、

評価においては男性的な絵を選ぶ傾向にあり、また審査においては、自由な精神が解放されているか否かを重要視し、技巧面に重きを置いていなかったとしている。

同じ2016年に、金山氏は今度は単独で、「岡本太郎（1911～1996）の美術教育活動への参加：一造形教育センターにおける活動を着眼点として」<sup>(73)</sup>を発表する。同論考は、岡本が、当時の民間美術教育運動の一つである「造形教育センター」や「現代芸術研究所」に参加していたという事実をもとに、それらのメンバーと岡本との関係や、彼の教育的立場を明らかにすることで、美術教育史においても岡本が足跡を残したことを明示している。金山氏によれば、岡本は、大衆に対する芸術啓蒙活動をさらに充実させようと同センターや同研究所に参加することで、独自の美術教育観を主張する機会を得たという。

金山氏と向野氏は、再び二人で同年に「岸田劉生（1891～1921）と岡本太郎（1911～1996）の芸術教育論：大正期の自由画教育に対する見解に着目して」<sup>(74)</sup>を発表する。両氏は、親子二代に亘って芸術分野で活躍するとともに、東京で育って図画教育に対して発言もしていた点で共通する岸田劉生と岡本太郎を取り上げ、両者がいずれも生存していた1911年から1929年までの間の山本鼎の「自由画教育運動」による影響も考慮しながら、両者の芸術教育論をそれぞれ、岡本については『今日の芸術』、岸田については『図画教育論』<sup>(75)</sup>を中心に比較検証している。同論考では、岡本が受けた慶應義塾幼稚舎の学校教育に、岸田が設立した草土社のメンバーが関わっ

ていることから、間接的ではあるものの、岸田と岡本に接点があることが指摘され、結論として、岡本は図画教育に対して「本能的な表現欲」を求めていたとしている。さらに今後の解明点として、①岡本家と岸田家の直接的な関わりの有無、②岡本が受けた学校教育の彼の芸術教育観への影響、③岡本家の家庭教育（両親）が岡本に与えた影響、の3点を挙げている。さらに同年、同じ金山氏と向野氏は、「岡本太郎（1911～1996）による児童画に現れる太陽：著書『今日の芸術』（1954）「赤丸チョンチョン、子どもの『八の字』」をめぐって」<sup>(76)</sup>をも発表している。岡本は、自著『今日の芸術』中で、学校の図画教育に対して批判的な意見を寄せた。そして赤い丸にチョンチョンで描かれる型にはまった児童画の太陽の絵を導入として、児童の太陽に現れる表現の違いを始めとした日本における太陽表現の傾向に関して考察を行なった。そして両氏は、岡本は児童に本能的かつ自由に絵を描いて欲しいと期待し、それゆえ児童画によく見られる太陽のような符牒的な表現は創造的でないとしたとしている。

#### 4. その他の先行研究

岡本は、以上の学問領域以外の識者の関心も集めている。例えば、日本近現代文学、比較文学者の波瀾剛氏が2002年に「復員者の情熱：岡本太郎 第一画文集『アヴァンギャルド』」<sup>(77)</sup>を発表している。岡本はフランスでアヴァンギャルド芸術を実践し、帰国後、日本において「アヴァン

ギャルド芸術」を打ち立てた創始者であるが、戦前の彼の文章には「アヴァンギャルド」という言葉は確認できない。そこで波瀾氏は、岡本が何故戦後になって同用語に固執したのかを解明点とした。そして同論考において、第一画文集『アヴァンギャルド』<sup>78)</sup>に岡本が掲げた文章を中心に、岡本の「アヴァンギャルド」概念の形成過程を検証している。

その他に、臨床心理学分野から岡本にアプローチした論考もある。長谷川啓三氏が2005年に発表した「太陽の塔は弥生文化の中に建てた縄文——岡本太郎の巨大なユーモア」<sup>79)</sup>がそれである。長谷川氏は、以前から臨床心理学とユーモアの関係を考察していたが、同論考では岡本を、「太陽の塔」を始め、作品や言動にユーモアを用いていた人物としている。

同じ2005年に、今度は民俗学者の赤坂憲雄氏が、『東北学』上に8回に亘って「風土の旅人たち」<sup>80)</sup>を連載する。そして、岡本が「伝統論」の執筆のために訪れた東北や沖縄、『美の世界旅行』<sup>81)</sup>の執筆のために訪ねた韓国などで彼の興味や関心を引いた地方の行事や、岡本の民俗学者としての一面について紹介している。

さらに2013年には、フランス文学者の酒井健氏によって、「日本人の継承 三島由紀夫と岡本太郎：歴史性と演劇性」<sup>82)</sup>が発表されている。同論考は、バタイユに影響を受けながら、共感の核にある欲望をバタイユとは別の形で表明し、さらにその表明に同時代の日本人に対する批判を含ませている岡本とバタイユとの関係を検証とするものであった。同氏は、岡本をバタイユ

に影響を受けた表現者として取り上げ、彼がテーマ館のプロデューサーを務めた1970年の日本万国博覧会に焦点を当てて、テーマ館での岡本による未開民族の文化財展示や、当時の気運であった進歩主義に逆行する《太陽の塔》の制作といった彼の表現や発想に、バタイユがどのように関わっていたかを検証している。

## 結語—岡本太郎研究の現状とその問題点

以上、学術論文を中心とした先行研究を大きく四つの専門分野（「美術批評家・美術史家」、「社会学者・哲学者・思想史学者」、「美術教育学者」、「その他の分野」）に分けて、それぞれの分野ごとに論考を整理して発表、発行年順に列挙し、それらの内容を概観、検証してきた。冒頭の問題提起のうち、どのような研究者が岡本について研究してきたかについては、それらの分類が自ずと示していると言えるが、それらを列挙すれば、美術批評家、美術史家、社会学者、哲学者、思想史学者、美術教育学者、民俗学者、日本近現代・比較文学者、フランス文学者が挙げられる。次いで彼らが何をどのような方法で、どこまで研究しているかについて、分類順に整理していく。

まず、「美術批評家・美術史家による先行研究」においては、岡本の実験や著作、作品が研究対象とされていた。そして思想については、岡本の観察眼や思想に影響を与えた人物として、パリ時代に講義を受講したマルセル・モースや交流を持っていた



ジョルジュ・バタイユ、日本復員後に交流を持った花田清輝、フランスから著書を取り寄せたミルチャ・エリアーデが研究対象とされ、彼らから岡本への影響内容や、その後の岡本の芸術活動への反映状況などが考察、解明されてきた。岡本の著書に着目した研究では、『今日の芸術』や、『日本の伝統』を始めとする「伝統論」における彼の主張や執筆目的、刊行当時の同著作群の社会における受容状況が考察、解明されつつあると言える。岡本の作品に関しては、『太陽の塔』の造形性に関する総括的な研究や、制作当時の社会における同作品の受容の検証、また旧東京都庁壁画作品群の設置の背景や造形性に関する研究が進められていた。その他、岡本と雑誌やテレビとの関わりや、彼の両親の当時の社会における受容状況と彼の美術活動の評価との関係、さらに岡本が初めて縄文土器と出会った場所である博物館の当時の状況の考察、検証が着手されていた。

続いて「社会学者・哲学者・思想史学者による先行研究」では、当然ながら思想に着目した研究が、ライフヒストリー法や、岡本自身の著書から彼の思想を取り出す方法で進められていた。具体的には、岡本の社会観や、彼の思想家や社会学徒的側面、彼が主張した「対極主義」に関する考察が進められ、さらにそれらの思想が『太陽の塔』や万博テーマ館の企画・構成にどのように反映されたかについての考察や解明が進められていた。

次いで「教育学者による先行研究」では、ジョルジュ・バタイユの思想と岡本との関係など、思想面に着目した論考も確認

できたが、多くは美術教育における岡本やその作品の題材化や、岡本の美術教育思想に関する考察など、研究者自身の専門分野に関連のある研究が各々の専門分野の方法で進められていた。

最後に「その他の分野による先行研究」では、日本近現代・比較文学者やフランス文学者などが、岡本のアヴァンギャルド概念の形成過程や、岡本の芸術活動へのバタイユの影響と反映について、岡本の著書中のテキストや、各々の専門分野の視点からの考察によって検証されていた。

以上の概観を総括すると、岡本の思想に関する研究が、四分野のそれぞれにおいて取り組まれており、岡本の芸術活動や啓蒙活動、執筆活動、美術教育活動における主張や、その思想に影響を与えた人物などが多角的に考察、検証されていた。また、春原氏や志賀氏によって、戦後から晩年にかけての岡本の啓蒙活動の社会における受容状況が目下解明されつつあった。その反面、多くの著作の刊行や美術の啓蒙活動を行なった岡本の思想が、彼の作品にどのように反映されているかについての検証は未だ不十分と言える。岡本の作品に焦点を当てた学術論文は、管見の限り、もっぱら『太陽の塔』と旧東京都庁壁画作品を取り上げたものに限られ、その他の作品についての考察は、岡本研究の今後の課題の一つとして挙げられる。

また、各分野の研究者が研究対象としている時代は、1930年代のパリ滞在時代から1970年開催の日本万国博覧会のための『太陽の塔』の制作までに集中しており、晩年の活動に関しては、榎木氏や春原氏に

よる岡本と雑誌やメディアとの関係の考察は確認できたものの、芸術活動や作品に関する研究は皆無に等しい状況にあった。こうした状況については、2002年時点で榎木氏が、「太郎がこの世を去ってからというもの、多くの論者によって、太郎の功績が再評価されている」、「しかしそれらの論旨も一九七〇年以後の太郎となると途端に筆先が鈍る」<sup>83)</sup>と言及していたが、それは現在においても殆んど変わっていない。

本稿における作業によって、岡本太郎とその作品に関する先行研究の現状と問題点、すなわち未解明事項を明らかにすることができた。今後は、導き出した未解明事項に留意しながら、岡本太郎とその思想、作品に関する研究を進めて行きたい。

[注]

- (1) 岡本太郎『今日の芸術』光文社 1954年
- (2) 岡本太郎『日本の伝統』光文社 1956年
- (3) 岡本太郎『日本再発見 - 芸術風土記』新潮社1958年
- (4) 岡本太郎『忘れられた日本〈沖縄文化論〉』中央公論社 1961年
- (5) 岡本太郎『神秘日本』中央公論社 1964年
- (6) 日向あき子「岡本太郎ルネッサンス 第1回 戦後美術と「TARO」プロフィール——アウトサイダーから正統へ」『版画芸術101号』1998年 154~161頁/日向「岡本太郎ルネッサンス 第2回 華麗・壮絶な「芸術聖家族」(前)——一平・かの子と太郎」『版画芸術102号』1998年 144~151頁/日向「岡本太郎ルネッサンス 第3回 華麗・壮絶な「芸術聖家族」(後)——往復

- 書簡・「母子叙情」期を経て」『版画芸術103号』1999年 148~155頁/日向「岡本太郎ルネッサンス 第4回 パリ時代/青春・太郎伝(上) 30年代前半 絵画代表作を中心に」『版画芸術104号』1999年 146~153頁/日向「岡本太郎ルネッサンス 第5回 パリ時代/青春・太郎伝(下) 30年代後半バタイユとの交友を中心に」『版画芸術105号』1999年 152~159頁/日向「岡本太郎ルネッサンス 第6回 ニーチェの影響——1930年代～」『版画芸術106号』1999年 160~167頁/日向「岡本太郎ルネッサンス 第7回 芸術家の祖型・現代の呪術師(シャーマン)——多面体・太郎像(上)」『版画芸術107号』2000年 136~143頁/日向「岡本太郎ルネッサンス(8・最終回) 芸術家の祖型・現代の呪術師(シャーマン)——民族学と「太陽の塔」(下)」『版画芸術108号』2000年 158~165頁
- (7) 榎木野衣「黒い太陽と赤いカニ——岡本太郎と日本(1) 顔のなかの無数の「黒い穴」」『中央公論117(1)号』2002年 312~321頁/榎木「黒い太陽と赤いカニ——岡本太郎と日本(2) 「シリアス」が「お笑い」にすり替わるループ中央公論」『中央公論117(2)号』2002年 300~309頁/榎木「黒い太陽と赤いカニ——岡本太郎と日本(3) パズルのなかの「爆発」」『中央公論117(3)号』2002年 280~289頁/榎木「黒い太陽と赤いカニ——岡本太郎と日本(4) 血を流しながらにっこり笑おう」『中央公論117(4)号』2002年 296~305頁/榎木「黒い太陽と赤いカニ——岡本太郎と日本(5) みやげもののような日本への挑

- 戦』『中央公論 117(5)号』2002年 288～297頁／榎木「黒い太陽と赤いカニ——岡本太郎と日本(6) 縄文的なるものと日本的なるもの」『中央公論 117(6)号』2002年 272～281頁／榎木「黒い太陽と赤いカニ——岡本太郎と日本(7) 日本と日本列島の果てしない相剋」『中央公論 117(7)号』2002年 282～291頁／榎木「黒い太陽と赤いカニ——岡本太郎と日本(8) 非道の殺戮とギャグ漫画」『中央公論 117(8)号』2002年 262～271頁／榎木「黒い太陽と赤いカニ——岡本太郎と日本(9) 美術／漫画の系譜」『中央公論 117(9)号』2002年 264～273頁／榎木「黒い太陽と赤いカニ——岡本太郎と日本(10) 太陽の塔の皮膜を裏返す」『中央公論 117(10)号』2002年 306～315頁／榎木「黒い太陽と赤いカニ——岡本太郎と日本(11) 見えない都市と見えすぎる塔」『中央公論 117(11)号』2002年 300～309頁／榎木「黒い太陽と赤いカニ——岡本太郎と日本(12) 1970年の祭りの理論」『中央公論 117(12)号』2002年 294～303頁／榎木「黒い太陽と赤いカニ——岡本太郎と日本(最終回) なんにもない世界」『中央公論 118(1)号』2003年 354～363頁
- (8) 榎木「黒い太陽と赤いカニ——岡本太郎と日本(1)……前掲論説」313頁
- (9) 「特集 明日の岡本太郎」『東北学 [第2期] 13号』2007年 6～141頁
- (10) 「特集：家族の肖像——岡本太郎・かの子・一平」『國文學 52号』2007年 6～144頁
- (11) 柴橋伴夫「日本文化に於ける土俗と現代——岡本太郎を手がかりにして」『日本私学教育研究所紀要 42号』2007年 223～234頁
- (12) 「生誕 100周年記念特集 岡本太郎」『美術手帖 63号』2011年 9～96頁
- (13) 「生誕 100周年記念大特集 岡本太郎を知るための 100の Q & A」『芸術新潮 62号』2011年 12～92頁
- (14) 「岡本太郎新世紀」『別冊太陽 179号』2011年 1～189頁
- (15) 「特集 岡本太郎 爆発は永遠だ」『すばる 33号』2011年 183～216頁
- (16) 春原史寛「岡本太郎《太陽の塔》の研究」『芸叢 18号』2001年 45～84頁
- (17) 小金沢智「岡本太郎『今日の芸術』考——本当に、今日の芸術は、うまくあってはいけないのか?」『明治学院大学大学院文学研究科藝術學専攻紀要 6号』2007年 83～110頁
- (18) 岡本『今日……前掲書』87頁
- (19) 春原史寛「岡本太郎「縄文土器論」の背景とその評価——戦後日本の「美術」と「縄文」をめぐる動向についての一考察」『藝叢 25号』2008年 79～102頁
- (20) 岡本太郎「四次元との対話 縄文土器論」『みづゑ』1952年
- (21) 岡本太郎「縄文土器—民族の生命力」『日本の伝統』光文社 1956年
- (22) 春原史寛「岡本太郎《太陽の塔》をめぐる言説——その受容と評価、日本万国博覧会と美術・建築・デザイン」『藝叢：筑波大学芸術学研究誌 24号』2008年 107～132頁
- (23) 大谷省吾「岡本太郎の“対極主義”の成立をめぐる」『東京国立近代美術館研究紀要 13号』2009年 18～36頁
- (24) 大谷「同上」33頁
- (25) 岩田ゆず子「岡本太郎の旧東京都庁壁画

- をめぐる考察』『女子美術大学芸術学科紀要 9号』2009年 13～35頁
- (26) 岡本太郎による旧東京都庁に設置された壁画は、《日の壁》、《月の壁》、《建設》、《赤の壁》、《緑の壁》、《黄の壁》、《青の壁》の7作品11面で構成されている。
- (27) 岩田「岡本太郎の旧東京都庁……前掲論文」33頁
- (28) 岩田「同上」33頁
- (29) 佐々木秀憲「岡本太郎にみるミルチャ・エリアーデの影響」『宗教研究 84号』2011年 1123～1124頁、
- (30) 志賀祐紀「岡本太郎の「前衛」——『岡本太郎関連記事』1949 No. 1 から」『米沢史学 27号』2011年 108～97頁
- (31) 志賀「同上」100頁
- (32) 志賀祐紀「岡本太郎「光琳論」：「前衛」の流行と展開」『美術史論集 12号』2012年 28～43頁
- (33) 篠原華子「岡本太郎における装飾：「光琳論」と「縄文土器論」からみる空間性」『文化交流研究 8号』2013年 183～204頁
- (34) 篠原「同上」196頁
- (35) 篠原「同上」197頁
- (36) 志賀祐紀「岡本太郎の「伝統論」に関する一考察」『お茶の水女子大学人文科学研究 9号』2013年 47～57頁
- (37) 岡本太郎「光琳論（上）非常美の本質」『三彩』1950年 28～31頁／岡本「光琳論（中）非常美を支えるもの」『三彩』1950年 25～32頁／岡本「光琳論（下）芸術に於ける装飾性」『三彩』1950年 16～19頁
- (38) 岡本太郎「連載 日本の伝統 庭園について」『草月』1955年 6月／岡本「同上」1955年 7月／岡本「同上」1955年 8月／岡本「同上」1955年 9月／岡本「同上」1955年 12月／岡本「同上」1956年 1月
- (39) 志賀「岡本太郎の「伝統論」……前掲論文」55頁
- (40) 志賀祐紀「「前衛」岡本太郎の位置：一九四〇年代後半から一九五〇年代初頭における変遷」『米沢史学 29号』2013年 27～41頁
- (41) 志賀祐紀「岡本太郎『日本再発見：芸術風土記』に関する一考察：新たな「日本文化」像構築の手段と狙い」『お茶の水女子大学人文科学研究 10号』2014年 1～13頁
- (42) 志賀「同上」1～2頁
- (43) 志賀「同上」10頁
- (44) 春原史寛「岡本太郎『今日の芸術』（1954年）とその読者：美術書出版による専門家からの美術の解放」『藝叢：筑波大学芸術学研究誌 29号』2014年 19～28頁
- (45) 春原史寛「岡本太郎の多面的活動に関する一考察：雑誌・新聞・テレビとの関わりをめぐって」『群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編 50号』2015年 81～90頁
- (46) 春原「同上」85頁
- (47) 春原「同上」85頁
- (48) 春原史寛「岡本太郎と岡本一平・かの子の社会における受容の関連についての一考察」『芸術学研究 20号』2015年 9～18頁
- (49) 鈴木気帆「岡本太郎の縄文土器論：発見の場としての博物館」『武蔵野美術大学研究紀要 46号』2015年 89～98頁
- (50) 春原史寛「岡本太郎の伝統論の展開とその受容：『日本の伝統』『日本再発見』『沖縄文化論』『神秘日本』に注目して」『群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活

- 科学編群馬51号』2016年 31～49頁
- (51) 春原「同上」46頁
- (52) 春原史寛「岡本太郎研究：戦後日本美術の受容と芸術家イメージ」12102 甲第 7831号 2016年
- (53) 縄井杏子「岡本太郎の日本社会観——ライフヒストリー分析」『社会論集 8号』2002年 109～121頁
- (54) 縄井「同上」119頁
- (55) 犬飼裕一「思想家 岡本太郎 上」『北海学園大学学園論集 122号』2004年 15～36頁／犬飼「思想家 岡本太郎 中」『北海学園大学学園論集 124号』2005年 1～17頁／犬飼「思想家 岡本太郎 下」『北海学園大学学園論集 125号』2005年 1～21頁
- (56) 犬飼「思想家 岡本太郎 上……前掲論文」16頁
- (57) 西脇和彦「岡本太郎の方法論に関する社会学的一考察：ホットな弁証法によるBreakthrough」『学苑 911号』2016年 22～33頁
- (58) 伊藤徹「岡本太郎・主体性の神話——対極主義とその亀裂」『京都工芸繊維大学学術報告書4号』2010年 73～92頁
- (59) 伊藤「同上」75頁
- (60) 伊藤「同上」80頁
- (61) 伊藤徹「主体性の概念とその淵源」『京都工芸繊維大学学術報告書7号』2014年 13～25頁
- (62) 篠原敏昭「ベラボーナ夢——岡本太郎における祭りと万博」『駒澤大学外国語部論集 64号』2006年 171～195頁
- (63) 塚原史「岡本太郎とバタイユ——太陽の塔解読の試み」『國文學 52号』2007年 15～31頁
- (64) 塚原「同上」28頁
- (65) 塚原史「岡本太郎とマルセル・モース——一九三〇年代パリとミュゼ・ド・ロム」『東北学 [第2期] 13号』2007年 52～59
- (66) 塚原「同上」53頁
- (67) 岩野卓司「「戦い」としての芸術：岡本太郎の聖なる根源」『明治大学教養論集 516号』2016年 53～65頁
- (68) 隅敦「美術館での作品鑑賞を表現に生かす授業実践に関する考察：岡本太郎の連作をつくる実践を通して」『教育実践総合センター研究紀要 15号』2003年 71～79頁
- (69) 隅「同上」73頁
- (70) 蝦名敦子「縄文・棟方志功・岡本太郎——鑑賞教育の題材化の検討」『芸術文化 12号』2007年 3～13頁
- (71) 安井健「岡本太郎によるジョルジュ・バタイユの思想の継承と決別」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 5号』2011年 19～29頁
- (72) 金山愛菜・向野康江「岡本太郎（1911～1996）の児童画に対する要求水準について：『児童画評価シリーズ2』を手掛かりに」『茨城大学教育実践研究 茨城大学教育学部附属教育実践総合センター編 35号』2016年 87～101頁
- (73) 金山愛菜「岡本太郎（1911-1996）の美術教育活動への参加：一造形教育センターにおける活動を着眼点として一」『美術教育学研究 49号』2017年 113～120頁
- (74) 金山愛菜・向野康江「岸田劉生（1891～1929）と岡本太郎（1911～1996）の芸術教育論：大正期の自由画教育に対する見解に着目して」『茨城大学教育学部紀要. 教育科学 66号』2017年 51～63頁

- (75) 岸田劉生『図画教育論』改造社 1925年
- (76) 金山愛菜・向野康江「岡本太郎（1911～1996）による児童画にあらわれる太陽：著書『今日の芸術』（1954）「赤丸チョンチョン、子どもの『八の字』」をめぐって」『茨城大学教育実践研究 36号』2017年 83～97頁
- (77) 波瀾剛「復員者の情熱：岡本太郎 第一画文集『アヴァンギャルド』」『文学研究論集 20号』2002年 106～90頁
- (78) 岡本太郎第一画文集『アヴァンギャルド』月曜書房 1948年
- (79) 長谷川啓三「太陽の塔は弥生文化の中に建てた縄文——岡本太郎の巨大なユーモア」『現代のエスプリ 454号』2005年 191～197頁
- (80) 赤坂憲雄「風土の旅人たち（1）岡本太郎／獣の匂い、または東北的な（上）」『東北学 [第2期] 1号』2004年 138～149頁／赤坂「風土の旅人たち（2）岡本太郎／獣の匂い、または東北的な（中）」『東北学 [第2期] 2号』2005年 191～199頁／赤坂「風土の旅人たち（3）岡本太郎／獣の匂い、または東北的な（下）」『東北学 [第2期] 3号』2005年 169～181頁／赤坂「風土の旅人たち（4）岡本太郎／沖縄、ひとつの恋のような（上）」『東北学 [第2期] 4号』2005年 226～236頁／赤坂「風土の旅人たち（5）岡本太郎／沖縄、ひとつの恋のような（中）」『東北学 [第2期] 5号』2005年 273～281頁／赤坂「風土の旅人たち（6）岡本太郎／沖縄、ひとつの恋のような（下）」『東北学 [第2期] 6号』2006年 211～224頁／赤坂「風土の旅人たち（7）岡本太郎／韓国、臍の緒としての（上）」『東北学 [第2期] 7号』2006年 218～230頁／赤坂「風土の旅人たち（8）岡本太郎／韓国、臍の緒としての（下）」『東北学 [第2期] 8号』2006年 219～225頁
- (81) 岡本太郎『美の世界旅行』新潮社 1982年
- (82) 酒井健「日本人の継承 三島由紀夫と岡本太郎：歴史性と演劇性」『言語と文化 10号』2013年 145～162頁
- (83) 榎木「黒い太陽と赤いカニ——岡本太郎と日本（2）……前掲論説」305頁